



令和7年度 幼児教育研修（乳児・3歳未満児保育）
 「乳児・3歳未満児の育ちを支える保育者の関わり」
 ～愛着の獲得や乳児・3歳未満児の遊びと生活環境、
 それを支える保育者の関わりについて学ぶ～
 日時：令和7年9月3日（水）15：00～17：00
 会場：足立区役所 庁舎ホール
 講師：國學院大學 教授 塩谷 香 氏

質の高い保育とは？

基本に忠実であること

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、はじめの100か月の育ちビジョン



子どもの最善の利益が守られること

- ・子どもの人権が社会や大人の都合で侵害されることなく、豊かな子ども時代を保障されて、健やかに成長できるよう、保育する
- ・保護者が子どもに関心をもって子どもの成長に愛情をもってかかわろうとするよう、支援する



愛着の重要性と担当制

保護者への支援は子どもの最善の利益のために行われるもの、これがなければ保育へ効果が期待できない

健全な（安定した）愛着→基本的信頼感の獲得

心の育ち、安定、積極性など、人格の基礎にかかわる

主に生活上の介助をなるべく担当者が行うことで、生活の安定と共に子どもの情緒の安定につながる



担当制

遊びは様々な人と関わられるように工夫する
 子どもの要求がある時はすぐに対応する

担当者は子どもの理解者であり、園での育ちの責任者

確実な愛着対象が獲得できると、一人の担当者に固執することなく、2番3番の愛着対象をその場ごとに自分で選択できるようになる（開かれた担当制）

乳児保育の有効な保育方法の確立

保護者対応も含む



担当制の
 確実な実行



保育する集団はできるだけ小さく、保育にあたる保育者はできるだけ少なくする



毎日のルーティンとして子どもが理解できるように（見通しがもてる）

生活の仕方や場所、援助の方法はなるべく変えない



待たせない保育を行うための工夫



家庭との連続性のある保育の工夫



発達にあった遊びや生活の環境構成

子どもの脳を育てる3つのT ダナ・サスキンド(2018)「3000万語の格差」より

①チューン・イン

大人が子どもに集中し、関心を向けている対象に気がつき、それについて話す

お花があるね
 きれいだね



②トーク・モア

さらに言葉をかける、子どもの行動の言語化、大人の行動の説明など

触ってみたいね
 お花の匂いを嗅いでみようか



③テイク・ターンズ

子どもと対話する、大人が一方向的にリードするものではない、言葉がなくても表情やしぐさを読み取る、気持ちを汲み取って言葉にすること！

あっ!あっ!

ここに虫もいたね
 見つけて嬉しいね



※命令や禁止の言葉は、子どもの言葉を習得する力を抑える、子どもの発達の足を引っ張る
 ※脳を育てる方法はたった一つ！子どもが発信し、それに大人が応える形のやり取りである
 「強い脳はつくられるものであり、生まれてくるものではない」

乳児期の遊びと生活の環境づくりと援助

乳幼児期の保育は、生活習慣の自立への援助が大きな柱

- ・「自分でやりたい」「自分からする」という気持ちを大切に、できたことよりも、やろうとしたことを評価する
- ・子どもの力でできることを考えながら、さらにそれを可能にできる環境を考える
- ・子どもなりの見通しが立つように、生活環境や動線を工夫する(子どもの動線が混乱しないように)
- ・うまく流れができ、子どもなりの見通しができてきたら、声掛けをしないようにする
- ・子どもたちの混乱を防ぐために、流れや生活環境はできるだけ変えない

必要性

手には菌がいっぱいついてるから洗おう

見通し

手をしっかり洗うと風邪をひかなくなるよ



叱責や脅かしは逆効果

例) 食事のための環境づくりのポイント

くつろげる、集中できる環境

足や背中がしっかりと着く椅子、高すぎないテーブルなど

介助する大人が頻繁に動かなくてよいように準備や整備を行っておく

意欲や発達、力に合わせた食具

スプーンの柄の長さ、重さ、容器の形態の工夫等、時期や方法を十分検討する

量は少なめに、全種類を出し、選んで食べ始めることができるようにする



・最も大切なことは「好き嫌いをなく全部食べられる」ことではなく、食べることを楽しいと思えること
→毎日の生活の中で「おいしかった」「楽しかった」という満足感、充実感を積み重ねること

発達を考慮した遊びの環境構成と援助

発達や子どもの興味・関心に合わせて環境・教材を変えていく
自分から周囲の環境にかかわろうとする、かかわりたくなるような遊び環境を作る
乳児なりの試行錯誤、探索(学びになる!)ができるような遊びを考える
※子どもの成長の変化を見逃さない

必要な直接的援助は意外に少ないもの
「転ばぬ先の杖をあえて外す」ことで、子どもができることを奪わないようにする

重要なことは、保育者が働きかけ(環境構成も含む)を意識して、援助を行うことである

受講生からの質問



受講生より

- ① 1歳児クラス20人。乳児集団はなるべく小さくしたいと思っているが、工夫した方がいいことはあるか。
- ② 入園したばかりで不安があるのか、プラレールやミニカーを離さない子どもがいる。
- ③ パズル、お絵かきが好きな子どもが多いが、片付けられずバラバラになってしまいがち。今は子どもの目の届かないところに置いて、要望があれば出しているが、なるべく子どもの手の届くところに置いて遊びを選べるようにしたい思いもある。

- ① 2歳児はできたら10人程度で生活したい。場面によって分けたり、時間差をつけることも有効。広さがあまりないなら、廊下、玄関を遊びのコーナーにする工夫もある。
- ② 家庭にあるものを園に持ち込むことの意義、意味を考える。家庭と同じものが園にあることで落ち着く子どももいる。1年間ずっと置いておくのではなく、時期など、子どもによって流動的に考えると良い。
- ③ 丸一日置いておくのではなく、人数が少なくなってきた時や、じっくり遊ぶ時間など、特別があってもいい。午前中に体を動かしている時は無くすなどして、活動のメリハリをつける。2歳児であれば、ジップパ一袋にパズルのピースを入れると、片付けやすく常時置いておくこともできる。



講師より

受講生の報告書より

スキンシップや信頼関係を築けていることが愛着の全てではなく、一人の大人に固執せず、場に応じて子ども自身が大人を選べるのが大切だと改めて感じた。【転ばぬ先の杖をあえてはずす】という言葉については、改めて一人一人にしている援助が本当にその子にあってのものなのかを考える良いきっかけになった。

特にトイレトレーニングについては担任間での悩みでもあったので、参考にしながら進めていきたいと思えます。愛着の担当制については、認識の違いで“自分の担当の子だけ…”と間違った方向にいく場合があるので職員が同じように認識する必要があると感じました。